

# 「く」の字触り 認知症を検査

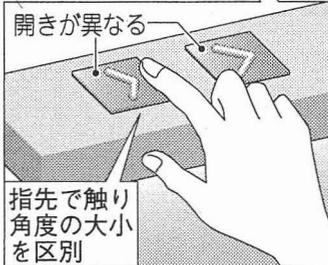
岡山大

早期診断に応用へ

「く」の字が、異なる角度で開いて盛り上がった二つの板を指先で触り、角度の大小を区別する実験で、アルツハイマー病の患者は健常者に比べ正答率が低いことが分かった。

## 触覚による角度識別実験

研究の対象は  
●健常者  
●「軽度認知障害」の患者  
●アルツハイマー病患者



岡山大の呉景龍教授(生体計測工学)らのグループが28日発表した。呉教授によると、認知症は「見えない障害」とされ、早期診断の方法が確立されていない。触覚を新指標にすることで、早期のアルツハイマー病診断に応用することが期待できるといふ。

呉教授らは、くの子の開きを点字のように盛り上げた4枚四方の亚克力板9枚を用意。角度は60度から少しづつ大きくなっており、最大で110度。アイマスクをした患者に開きの異なる2枚の板を触らせ、60度と比べてどちらの角度が大きいか区別してもらう。研究の対象は、健常者14人、アルツハイマー病に先行する「軽度認知障害」の患者10人、アルツハイマー病患者13人で、いずれも60〜80代。健常者は約8度という小さな角度差で正答できたが、軽度認知障害患者は約14度、アルツハイマー病患者は約25度の角度差がないと正答できなかった。呉教授は「装置の小型化や検査時間の短縮の研究を進め、実用化を目指したい」としている。